

演題9. 顎関節症状を有する患者の臨床症状とMRI  
所見との関連性について

○飯塚 康之, 三浦 廣行, 石川富士郎  
伊藤 紫織\*, 小西 信浩\*, 坂巻 公男\*

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座  
岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座\*

顎関節症症状を有する患者の矯正治療を行う際、顎関節内部の病態を把握しておくことは、治療方針の決定にも係わる重要な要件である。

今回、患者の問診時の臨床症状とMRI所見による顎関節内部の病態との関連性について検討を行った。対象者は、当科外来における現症あるいは既往に顎関節症症状のある患者70名(男性:15名,女性:55名,7歳10カ月~49歳4カ月)である。臨床症状は、雑音、疼痛、異常運動に着目した。MRI所見については、前頭面、矢状面の二方向のうちどちらか一方でも円板の転位が認められるものを、円板転位有りとした。症状の発症側と円板転位の発現側との関連については、症状が両側にみられるにもかかわらず、片側にしか円板転位を認めない例や、両側に症状があるにもかかわらず、両側とも円板転位を認めない例があった。また、片側で顎関節症症状がみられる例のうち、健側で円板転位の生じている例が認められた。そこで、70例の顎関節を左右140関節に分けて検討を行ったところ、円板転位の割合は、雑音67.4%、疼痛61.1%、異常運動63.1%であった。さらに、現症ならびに既往との関わり、症状の複合化に伴う円板転位の発現率の変化について検討した。

その結果、顎関節症の臨床症状から顎関節内部の病態についての確に診断を下すことは困難であるが、円板転位の有無を類推するにあたって、次に述べるような指針が考えられた。臨床症状は現症のみならず、既往についても考慮する必要があること。顎関節円板の位置異常を有する関節の中には、雑音や異常運動の生じない例も半数近くあるが、臨床上、顎関節円板の位置異常を類推する際に顎関節雑音と異常運動の二症状が、指標となりそうであること。症状の複合化が重度であるほど円板転位の発現率が、高い傾向がありそうであることの3点である。